
鬼男のカオス冥界事情

キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼男のカオス冥界事情

【Nコード】

N5156K

【作者名】

キヨウ

【あらすじ】

「閻魔大王」、お前を処刑する為だ」

冥界。常に根の國や黄泉と称される異世界に突如として現れた人に在らざる少女“エンマ”。突然の処刑宣告を言い渡され狼狽する天国組二人に、更なる処罰が下される。

『ギャグマンガ日和』の混沌世界に派遣されてしまったエンマと、彼女を含める計二人の変人の世話を受け持つ苦勞人“鬼男”の非日

常的な情景。

序章×冥府の覇者と地獄の遣い（前書き）

※初注意※

一、当小説は少年誌ジャンプによる『ギャグマンガ日和』と同じく少年誌ライバルに掲載されている『エンマ』のクロスオーバー作品です。

二、長編というよりは短編集の方が近いかもしれません。原作がどちら共オムニバスなんで。

三、オリ要素多数。特に天国組の設定が腐女子向け。

四、天国組中心の世界観。他代表的二組（飛鳥組・細道組）は既に死去してる設定。

五、死ネタ応用。またシリアス半分以上。

以降が許せない&嫌だ受け入れられないという方はお手数ながらブラウザバックプリーズ。

それでも読んでやるぜという勇気あるお方はどうぞお進みを〜

序章×冥府の覇者と地獄の遣い

「……だから、何故こんなところに子供が居るんですか！」

金髪的青年は背後に立ち竦む上司に怒鳴りつける。またセーラーだのシヨタなどとぼやいて誘拐して来たに違いない。何といっても、自分の上司は最低最悪な変態野郎なのだから。

しかし例の如く全力で首を振る痩せ気味の男。

「だから俺じゃないってば！ どうしてそういつも何の根拠も無しに俺だって決め付けるかなあ！」

「根拠なら嫌と言うほど有りますよ」

一呼吸置き、冷淡な物腰で一言。

「だってあんた、変態大王イカだろう？」

「ぐっ……！」

ぐうの音すら出せない状況。久々に聞いた嫌がらせ半分のあだ名が、それにトドメを刺す。

だけど俺じゃないと否定を続ける男と、じゃあ一体全体どうして子供が居るんだと更に憤る青年。激しい罵声の言い争いに屈する事も無く、例の子供は無表情でその様を見物していた。

不意に服の端を引っ張られ、青年はふっと眼下に視線を落とした。長身の彼からしたら、十代半ばの少女も見下ろす形になってしまう。感情を孕まない黒曜の瞳が青年を見詰めていた。

「迷子じゃないぞ」

「はあ？」

「お前、オレを迷子だと思っただろ」

少女の瞳が思わず半眼になる。

高くもないし低くもない中間辺りの声音。見た目は可愛らしいが、なにぶん無表情かつ男口調なもので、端正な顔立ちが台無しだ。

青年もまた掘りの深い表情にシワを寄せ半眼になる。

「同じ、なのか？」

「はあ？」

又も意味不信な発言をされ、自然と喧嘩腰になる青年。

「お前も人間じゃないんだな？」

「当たり前……ええッ!？」

最後の言葉は背後の男と重なった。少女はさも当然だというように手を組み、啞然とする二人を見据えた。

「オレは“エンマ”。冥界十王が一人、“閻魔王”の命でここに来た」

ビシッと人差し指を突き出し、鋭利な口調で続ける。その先には、確かめるように己を差す青年の上司が。

「“閻魔大王”、お前を処刑するだめだ——」

一章 獄卒鬼と紙人形（前書き）

金色の獄卒鬼は、少女相手に嘆息をつく。

一章 獄卒鬼と紙人形

冥府、冥界、黄泉、あの世。つまりは死後の世界ってことだな。

随分と昔に“閻魔”が唱えた説明だ。大体の方々には察しがつくだろうが、中には死しても尚状況を把握出来ないお馬鹿が居るのだ。そんな哀れで悲しい魂に、閻魔はさらいと言い放つ。そして理解を深めた上で改めて裁判に通って戴くのだ。

別に死者に対してそんなに優しく接しなくてもいいのになあ、とその横で傍観するのは彼の右腕である秘書“鬼男”。

閻魔お付きの秘書となって幾百年。第一印象からして最悪な主なのだが、それでも麾下に就かなくてはならない自分の儚さを時折痛感させられるのが鬼男の常だ。

「……だからってあれはないでしょ」

口の中で呟いて、鬼男は深々と息を吐いた。はい、今日で十二回目。頭の中のストップウォッチは既に一桁以上を数え、その事実には鬼男は更なる溜め息を吐く。はい、十三回目。

苦労人という立場を生まれながらに背負わされた彼だから仕方ないのだが、昨日今日の事件は明らかに不明瞭すぎる。はい、本日十四回目の嘆息。

今、彼は静まり返った廊下をひたすらに歩き進めていた。先程脳裏に浮かび上がっていた光景は半刻——1時間と表せば分かりやすいだろう——ほど前のものに過ぎない。

腕に抱える紙束がいつになく重い気がする。いや、気のせいでもないか。そんな紙束を後で処分するのは当人の閻魔なのだから、ほぼ当て付けに過ぎないのかもしれないが。

鬼男の重苦しい足取りがふと止まる。そしてじとっど背後を見や

った。

「何の用だ」

「観察」

少女は鬼男の強烈な眼光にものともせず、後ろで手を組み簡潔に答える。

「誰の」

「お前の」

単語のやり取りは尚も続く。

「何故」

「命じられたから」

「誰に」

「冥府十王が一人“閻魔王”から。閻魔王の監視と同時にお前の働きぶりも見とけて」

「あれじゃないのか」

やっとまともな返答を受けるも、鬼男は思慮深気に遠方を指差す。自然と耳に入る「やった、また新作出たし！ 早速予約予約うーっ」という奇声。

少女は首を横に振る。

「違う。この世界とは別の空間の閻魔王。それにこっちは閻魔王であって“大王”じゃない」

ああそうですか、と十五回目の嘆息をつき、鬼男は再び足を動かした。その後ろからてくてくと続く少女。

「なあなあ、お前は人間じゃないんだろう？」

昨日からずっと問い質されている質問だ。この場合詰問と述べた方がわかりやすいかもしれない。

確かに頭に生えた角を見れば一目瞭然だが、少女の背丈からして鬼男の脳天は窺えないはず。第一、それを一発で当てられてしまったのだから、鬼男は驚かされるばかりである。

その質問者である少女からも人間には無い気配を感じるし、やはり似た者同士ひかれあうのだろうか。

ひたすら黙殺してきた鬼男であったが、あまりにもしつこいアンド気が滅入っていたのもあってか、ついに観念する。

「そう。僕は獄卒の“鬼”。まっ、趣味の悪い名前からしてわかるだろうけど」

恨むぞ、名付け親。

ふうんと納得する少女。

「鬼、か。オレと似たようなもんだな」

微かに笑う気配がした。なんだ、コイツ意外にも笑うじゃないか。

「じゃあ何か？ お前もそういう類なのか？」

辿り着いた部屋のノブを回しながら鬼男が問う。目線は相変わらず少女に向かない。

「そうだ。オレの場合紙人形だな」

「へえ……はあッ!？」

昨日のようなすっとんきょんな奇声を上げ、鬼男の目線はようやく澄まし顔の少女へと向けられた。

健康的な黄白色の肌に、ほっそりとした小柄な体格。前髪で右目を隠しており、同じく左の目に掛かる筈の髪は見えやすいようにこめかみの辺りで結われている。

口元が笑っているにも関わらず漆黒の瞳は光すらも屈折せず、感情を滅多に現さない。

鬼男を面白そうに見返す目も、また静かな水面のように揺れることは無かった。

これが紙人形？ いや、本身など力が長けていれば容易く隠せるのだが、少女からは何一つ油断というものを窺えない。隙あらば懷から隠し持った凶器か何かで襲いかかって来るとさえ錯誤させる微量な殺気すら感じさせられる。

しかし普通の人間からして見たら余程の実力者ではない限り正体を見抜かれることはまず有り得ないだろう。ここまでくると見事しか言いようが無い。

「……エンマとか言ったな」

大きく見開かれた闇色の瞳が是を示す。鬼男は背筋に悪寒がじりじりとよじ登るのを自覚しながら言葉を紡いだ。

「お前の要件、もう一度述べてくれないか」

「『この世界に座する閻魔大王を処刑せよ。だが場合により、長期の視察を許可する。また、その獄卒鬼に属した秘書の样も同時に觀察すること』。お前がその秘書であり、あれが閻魔大王なんだろ？」

処刑。それは鬼男の脳裏に重く波紋のように広がった。

神の端くれである閻魔に、消滅は存在しない。しかしそれは存在であって、現時点の閻魔の魂自体が無に帰す場合は別だ。彼の魂が粒子となって消えた瞬間、冥界に新たな『閻魔』が誕生する。前世の記憶を持たず、全く別の姿で。もちろん性格も今のようではない。鬼男の知らない、鬼男を知らない、白紙の『閻魔』が。

その悲劇が起こらぬよう、守り通すのが己の性でもある。鬼男から僅かな闘気が漂い始めた。

「エンマ、僕の存在価値を知ってるか」

無言。

鬼男が目許を剣呑に顰める。

「創造主である大王を守護することだ。大王に仇なすモノなら誰であらうと滅することを許される。例えそれが掛け替えのない友人であらうとな」

「だが、お前の本心はそうは思わないんだろ？」

瞠目する鬼男に澄ました顔でエンマは続けた。

「矛盾してるんだな、お前は。そう断言出来るのは口先だけで、いざその時が来たら動けないはずだ。それぐらい、自分でもわかってんだろ？」

矛盾、か。尤もな箇所を突かれ、鬼男は茫然と呟いてこめかみを揉み、参ったと示した。揺るぎない忠誠心など、彼女の言う通り口先だけなのかもしれない。何人もの荒れ狂う亡者を手に掛けてきたが、それで無心でいられたといってしまうと見事な嘘になってしまう。

視界を覆った手の隙間から、エンマを見る。

こんな少女ですら、自分は手に掛けることを拒むだろうか。

「まっ、そうはならないように長期の視察が許されたんだ。オレの気が変わらないよう注意してくれよ、鬼秘書さん」

脇目も振らずスタスタと歩き去って行くエンマを見送り、その小柄な姿が視界から消えたと同時に鬼男はまたとない大きな溜め息を吐いた。

二章 愛されし実行犯（前書き）

自分も昔はシヨタの対象だったのだと思うと、急に物悲しくなる。

閻「そりやもう可愛かったよお。俺の後をちよこちよこと付いて来てさあ、どんなに癒されたことか」

鬼「……付いて行くなよ、僕……」

二章 愛されし実行犯

そりゃあさ、初めから解っていたさ。ヤツが姿を現して一番に喜ぶのはアイツだと。自惚れるアイツに怒号一発、「命狙われてるんですよ!？」 何故そんなにへらへら笑っていられるんですか!」と。だけどアイツは常のへにやら面で返すんだ。

「今すぐって訳じゃないんでしょ? なら大丈夫だよ」

過去に一度死にかけた奴がいうセリフか。

肩を落とす鬼男がそう呟いたのは、丁度昨日のこの時刻。

冥界と人界では時間の流れ方が異なる。天と地の狭間に位置する空間だからこそであろうが、閻魔はそこを忌み嫌う。『人間と違う』ところを。自分の立場自体を嫌っている彼は、とことん人間に似ようと努力する傾向にある。感情を備え、知識を駆使し、五感を持ち、人を愛する。

人間と同じ理性を望む、しかし人とは異なる存在……閻魔大王。

仲間の獄卒鬼達が口々に悪口を叩いているのを聴いてしまったことがあった。感情の乏しい鬼曰わく、『人間臭い』のだそうだ。そして、人間臭い馬鹿の近くに居る鬼男も、共に人間臭いのだと。

それでも鬼男が激昂せず見逃し素通りしたのは、実は人間臭いの嫌ではなかったからであろう。

逆に、仲間を哀れに思う。

——お願い、笑って……

懐かしい言葉が脳裏を過ぎるも、鬼男は頭を振ってそれを払った。あんな泣き顔、もう沢山だ。

「大王、何やってんですか」

半ば八つ当たり気味に書類を机に叩き付ける。

「何って……コミュニケーション」

「前言撤回。なに変態行為してんだ」

絶対零度の視線が注がれるのは、王座に座る閻魔と、そのお膝元にちよこんと腰を下ろしたエンマ。満足そうな閻魔に対し、エンマは不機嫌面の横に大粒の冷や汗を浮かべている。

鬼男の眼光を知ってか知らずか、閻魔がぬいぐるみの如く少女に抱き付く。

「だってだって、今日から暫く一緒に暮らすんでしよう？　なら早
い内に互いに馴染め合わな——」

「何だとッ!？」

閻魔の文句を大声で遮り、鬼男は答えを求めるようにエンマを見る。
やる。

表情に似合いな声調でエンマは答えた。

「だから昨日言っただろ。監視の下、お前等の厄介になる。暫し宜
しく」

閻魔の腕に抱かれながらエンマは頬杖をつく。こんな仕草が自分
に似ているのだが、今の鬼男はそれどころではない。

「な、ど、えっ——」

ふざけるなッ！

やっと声になったのはその一言だった。

「エンマ、お前、命奪うに次いで人の家に居着くつもりか!？」

そうだとエンマが半眼になる。

「仕事中は閻魔王様のところに帰れないからな」

「って事で居候決定だねッ、鬼男君」

こんな可愛い子を外に出しておけないでしょ？

晴れやかな閻魔スマイルを向けられ、鬼男はぐっと身を竦めた。

そりゃ、そうだけどさ……。

「手伝いぐらいはするぞ」

エンマの一言が鬼男の意を決めた。

不本意ながらもだけどな……。

※

現家族構成を述べておこう。否、『厄介者の参照』とでも称した方が早いだろうか。又は『頭痛の原因略図』か……。

地味な仕事は嫌いじゃないし、それをこなしながらつらつらと思案を巡らせるのはもっと嫌いじゃない。

鬼男は筆に使う墨をしゃしゃこと摺りながら書物に目を通し、頭の隅でこれから起こるであろう試練・難関を浮かべていた。

まず（一応）主のアイツからだ。

冷酷非情・無慈悲な恐るべき冥界の総首領。名を、“閻魔大王”。今回のエンマの標的であるようだ。だが先ほどのやり取りから窺えるように、彼は純粹な変態男である。短所累々は……後から嫌というほどわかるだろう。

次に“エンマ”。

話によると、こことは違う冥府からの殺人執行人であるそうだ。

彼女曰わく正体は紙人形。故に紙が苦手とする物質および状態は極端に嫌がるそうだ。自分が豆が苦手なのと同じだな、うん。

今のところ詳しい詳細は不明。まあ、自分の『徹底的に調べないと気が済まない気性』からして段々明らかになっていくのだろうな。

そして自分、“鬼男”。

前記にもあったように、生真面目かつ辛辣な獄卒鬼だ……閻魔談。事細かに砕くと獄卒ではなくその上の階級に当たる『閻魔卒』なのだが、地獄の生き物に変わりはないからよしとする。

最近にして苦悩が絶えない苦労人だったり、というのは秘密事項。出来れば格好良く従順な鬼でありたいからな。

果てさて、一体これからどうなるのやら。

重く嘆息ついた拍子に墨を握っていた手に力が入り、墨汁が衣服にべちゃりと飛び散った。

黒く染み広がるシミを見つめながら、鬼男は呟く。

「……普通の生活がしたい――」

それは、決して叶わぬ願いでありまして。

三章×楽観的な陰口（前書き）

“陰口”なんて言うけど、自分の場合普通に本人に向かって罵っているな。っあ、それじゃ“陰口”じゃなくて“罵声”か。

まあいいじゃないか。陰でこそそ言い合うより、面度向かって発言した方が本人の為にもなる。

閻「それがどれだけ俺の心^{ハート}を傷付けているか――」

鬼「おや大王。僕は本音を正直に述べてるだけですよッ」

閻「……………」

涙顔の閻魔を放置し、にこやかに告げる鬼男が、そこに在った。

三章×樂觀的な陰口

人界では五月の半ば頃であろう。じめじめとした湿気に鉛色の雲が長居する厄介な季節。

雨の匂いは好きだ。ほんのり土の薫りを含んだ雫は、銀の光沢を帯びながら地を濡らす。天から降り注ぐのに土の匂いを孕むとはなんと奇妙な現象だが、濡れた犬の臭いよりはマシだろう。

雨を見ていると、昔を思い出す。仲間の獄卒鬼より冷徹で感情の乏しかったあの頃、自分は雨にだけ興味を抱いたそうだ。じつと窓を通して雨空を眺めたまま、小一時間身じろごうともしない。そんな在りし日々を、閻魔から茫々と聞いた。そして訊いて来る。

なにを考えてたの？ と。

けれども、自分でも詳しくは覚えていない。それどころか冷徹だったことも初耳であった程だ。

昔の記憶は酷く曖昧で、時たま煩わしさを感じる。

いつの間にか閻魔が隣に居た。当たり前のように彼を守ってきた。過去など、仕事に関係なかったからだ。

——仕事熱心も対外にしないと。

閻魔が氣遣ってくれたのは嬉しかった。だがそれを言える立場かどうか、鬼男の口から零れたのだった。

素直じゃない。自分の汚点すら鬱陶しく思う今日この頃。

「……泣きたくなるよ、ほんと」

「なら泣きやあいいじゃん」

そう冷たく発したのは横で流れ作業を手伝うエンマだ。鬼男が記した記述に沿って書類を振り分けている。今日の死者に関するもの

である。

「意味わかって発言してる？」

「わかんない」

率直に返された返答に、鬼男は肩を竦めた。書類の脇の一覧に目を通してながら紙面に筆を踊らせる。

「それにしてもやっぱり多いな。あっちと大して変わらない量だ。……お前と閻魔大王だけでいつもやってるのか？」

エンマの言う『あっち』とは、彼女の元居た冥界だろう。遠路遙々こんな地まで来るとは、ご苦労なやつだ。

「まあね。お蔭で随分と集中力がついたよ。大王が仕事しない分、僕が補わなくちゃならないし」

はいと書類を渡し、エンマがそれを分ける。
返答に訝しんだのか、ついと紙面から鬼男へと顔を向けた。

「？　じゃあ他のヤツ等はいないのか？　十王とか、四天王とか」

「ああ。確かに別の神やらは居るけど、みんな関わりを持ちたがらないな。皆が皆自由人ばっかだから」

うちの大王とかね。

積もった紙束は一向に減る兆しが見えず、次いで時間も迫ってきている。冥府に休みなど偶にしか無い。

正確に返したのだが、エンマは納得がいかず更に小首を傾げてい

る。

「あまり深く考えない方がいい。考えれば考えるほどこんがらがって訳わからなくなる。つまりは曖昧なんだよ。神も、人も、理^{ことわり}全てが」

それがこの世界なのだから。

鬼男はおもむろに立ち上がると大きく腕を伸ばした。

「一回大王の様子を見て来ようか。アイツのせいで仕事が溜まってるんだ。少しばかり背を押さないと駄目なんだよ、アイツは」

そう言って苦笑する鬼男をはたと見やり、エンマも席を立ててその後続いた。

冥府の頂点に君臨する王の住まいを、主を含む皆は簡単に『閻魔庁』と称す。

どうか煌びやかで豪華絢爛な宮殿を思い浮かべないでほしい。自分だって出来る事ならそう改築したいのだが、なんせただ働きなのだから仕方がない。

閻魔庁の外見は不本意ながら地味なものだ。唐風なのではあるが、どうも威圧感が無いというか、平凡というか、つまりは地味なのだ。入り口の上には何を思っただか、『めんそくれ』なる沖縄の挨拶が記された看板が備え付けられている。だから一部の輩は閻魔庁の名を『めんそくれ』と勘違いしてしまう。

何故に『めんそくれ』なのかは不明。

しかし外見は地味でも、中身は意外と凄かったり。『人は外見で判断するな』とはまさにこのこと。……人ではないが。

閻魔庁は意外に広い。外見から打って変わり、建物内部には何十という個室が存在する。その光景は邸の限界を超え、さながら建築ミスをした『巨大旅籠』のようだ。

仕事場でありリビングでもある玄関口を始めに、左には天国への階段が、地獄門は右の地下道へ通じる。そしてもう一つの質素な扉からは、問題の『無限廊下』が続いているのだ。

主である閻魔ですら完全に把握しきっていない閻魔庁内部。下手をすれば、そのまま迷宮入りにでもなってしまうそうだ。

ふとそのことを思い当たり、鬼男は背後を顧みた。

「ちゃんと付いて来いよ。今度こそ迷子になっても知らないからな」

知らないといっても放っておく訳ではないが、それぐらい言い置いておかないと聞いてくれなさそうだから。

きよろきよろと辺り見回すエンマだが、ちゃんと鬼男の姿を視界に入れながら進んで来ている。

さすがに手を繋ぐのは気が引けたので、エンマの気配を感じつつ歩を進めた。

「広い建物は初めてなのか？」

「いや、今までにもいろんな所を廻ってるけど……こんな所は初めてだ」

そりゃそうだろうさ。ここまで広大となると、そう簡単に存在しないだろう。

それにしても、エンマはなかなか好奇心が旺盛なようだ。自分を初めて目にした時も隅々まで様子を窺っているのが見て取れたし、周囲を見るめつきが普段に無いほど輝いてるようにすら思える。

これで子供らしく振る舞ってくれたら、自分もこんなに緊張しなくても良いのに。

「……なんだかしんどそうだな」

不意に真横から声が発せられた。いつの間にか、歩調を速めたエンマが鬼男を見上げていた。

「そんなに気を張らなくてもいいぞ。まだ殺すと決まった訳じゃないんだから」

気遣っているのだろうが、いかせん抑揚に欠けるのだ。どうにも言葉に込められた本来の意味が損なわれる。

鬼男は微妙な苦笑を浮かべた。

「気を張るといふか……、それでも監視には変わらないんだろ？
誰しも緊張するさ」

「閻魔大王はどうなんだ？ ヤツは緊張感というものが微塵も感じられない」

処刑宣告をされたにも関わらず、普段となんら変わらない笑みを崩さない閻魔。そんな彼を酷く疑問に思っただろう。

半瞬きよとんとエンマを見ていた鬼男であったが、次の瞬間には吹き出すように笑い出した。

目を丸くしながら「何が可笑しい」と不満気に訊くエンマに、ひーひーと笑いを堪えながら鬼男は口を開いた。

「あの人は昔からそうなんだよ。何でも楽観的に考えて、嫌な事は全部水に流しちゃうのさ。――馬鹿なんだよ、大王は」

壁に手をつきながら笑いを堪える鬼男。そんな彼を未だ理解出来

ずに顔をしかめるエンマ。

だから、と鬼男は続けた。

「今回の件も蚊帳の外に考えてんだろ。逆に、お前が来て喜んでるだろうよ」

変態大王イカだからな、アイツは。

長年付き合いを一緒にしてきたからこそ言える理屈だ。

閻魔の文句を口にする鬼男を傍観して、エンマは不思議そうに目を細めた。

「……鬼男……楽しそうだな——」

四章×同類な他人（前書き）

大王曰わく、

「エンちゃんは冥府の花！」
だそうだ。

まあ男しか知り合いが居ない彼には最大のプレゼントであろうが、
どうか忘れないで戴きたい。

——彼女は、貴方の命を狙っているのですよ？

ここまでお気楽かつ馬鹿野郎はそう居ないだろうが（否、少なくともあと二人は知っているが）、現実はそう甘くない。

苦労人が苦労人らしく頭を抱えたくなるような現状がそこら中に
転がっている。いやあ、世界は上手く出来ているものだ。

苦労人・馬鹿の区別が明確に表されていらっしやる。

四章×同類な他人

痛切に、鬼男は思うのだ。

馬鹿は馬鹿でもアイツは良い馬鹿だ。笑みを絶やさず、いつも自分の周りに居てくれる。

返り血に濡れ穢^{けが}れたにも関わらず、その細い指で自分の頭を撫でてくれる。いい年して、しかも鬼男より幾分か背の低い閻魔に撫でられとなんと恥ずかしくなってしまう、顔を赤くほてながら思わず突き飛ばすか爪をぶっ刺してしまう。

それでも閻魔は臆せず笑顔を向ける。

——良くやったね、偉い偉い。

まるで子供扱いだ。

確かに自分は不死に近い閻魔から見れば経験が浅くまだまだひよっこな若者であろうが、その言い草はどうかと思う。

事実、閻魔は鬼男を我が子のように可愛がっている。獄卒から閻魔卒に昇進できたのもある意味彼のお蔭であろうし、他の鬼に比べ最も寵愛を受けていた。

一目で気に入ったんだよね、と閻魔は笑い飛ばしていたが、今になってその言葉の裏が理解し始めてきている。

だからこそ昔の自分は心に決めたのであろう。

この馬鹿を、命に代えてでも守り通そう、と。

「……なあ、鬼男」

「ん?」

横に並んで歩いていたエンマが、長身の鬼男を見上げた。歩幅が違うから自然とエンマの方が早足になる。

「閻魔大王のそこはまだか？」

「やっぱ、遠いか？」

エンマが口を不満そうに曲げて頷く。

長年ここで日々を過ごしている鬼男には何ら苦はないが、やはり非力な少女には辛い道のりなのか。

暫し唸って考えに考えた挙げ句、鬼男は仕方なく立ち止まりエンマの前で腰を低めた。

「乗れ。まだ距離はある。途中でへたれ込まれるのはごめんだからな」

硬直し驚くエンマと同じく、鬼男自身も自分のとった行動に啞然としていた。

なぜここまで気を許せたのだろう。相手は自分の上司の命を狙う殺人者だというのに。

やはり、似たような同種だからこそその思考なのであろうか。

目を見張るエンマに、早くと手と口で催促する。

と、背中にそろそろとした重みを感じ、鬼男は完全に身を預けたのを見計らって彼女を背負い立ち上がった。

軽い。まあ本身が紙なのだから体重が殆ど感じられないのだろうけど。

「……重いか？」

鬼男に全体重を預けたエンマが気遣わしげに訊く。

一方の鬼男は歩き進めながら笑った。

「全然。むしろ普段何もしないのと変わらないほどだ。いつもは大王を背負ってるからな」

夜勤に耐えきれず卓上で寝入ってしまった閻魔を、夜な夜な寝所に運び出している。

彼もまた体重が軽いのだが、エンマほどではない。首筋によだれを垂らされないよう細心の注意を払いながら寝所に運ぶ苦悩の絶えない秘書。

その穏やかな寝顔を向けられてはさすがの鬼男も叩き起こす気になれず、仕方なく背負ってやってるのだ。

「神族のくせに熟睡しやがって。別に給料上がる訳でもないのに。何やってんだろうな、僕は」

あはは……と苦笑を浮かべる鬼男。

お節介が多すぎるんだな、と付け加える彼に、エンマが口を挟んだ。

「オレの上司は……」

しかし躊躇いがちに一拍間を置き、言葉を紡ぎ出した。

「オレんとこの閻魔王様は、いつも忙しそうだ。オレが遣わされてるのも無駄な殺生のせいで溢れた死者を減らす為だし、少しでも労力を軽減させる為。鬼男の閻魔大王みたいに、笑ってるところを見たことが無いんだ」

無意識に肩を掴む手に力を込め、エンマは鬼男の首元に顔をうず

めた。

瞳孔を細め、呆然と聞き入っていた鬼男であつたが、そのまま無言でいることを最善とした。

全く。どちらも、大変な上司を持つてゐるものだ。

「――大王？」

その時、鬼男は声を聞いた。
足を止めて耳を澄ます。

確かに聞こえた。閻魔の声音ではない、誰か別の、低くも威厳を感じる若い男の笑声。

「鬼男、どうした？」

「わからない。大王じゃない誰かが、居る」

そしてその声は、閻魔の寛ぐ場である玄関口――執務室から響いて来る。

鬼男の返答を受けて同じように耳を澄ませていたエンマが突然背から下ろすよう耳打ちした。

「おい、エンマ！」

そして地に足を付けるな否や、弾かれたように走り出したのだ。

鬼男の呼声など聞き耳を持たず、一心不乱に廊下を駆けて行く。

何が、彼女を突き動かしたのだろうか。

鬼男も後に続き疾走しながら尚も耳をそばだてた。

「……………」

話し声がする。片方は間違いなく自分の良く知り得た主だが、時折相槌を打つように響くそれは、全く聞き覚えがない。距離があるので会話の内容までははっきりとわからないが、常人ではない予感を感じる。

執務室に続くドアの前で、エンマは止まっていた。

見事に気配を押し殺し、僅かに開けた隙間から中を窺っている。

しかし、彼女の様子が明らかにおかしいことに気づき、鬼男も息を潜めて共に覗き見た。

「……大王」

居た。嫌な悪寒に外し、無事だったのだ。

密かに安堵し、鬼男は閻魔の向かいに座って話している人物に視線を向けた。

「……………」

均等のとれた長身の男だ。鬼男より頭ふたつ分は高いだろう。自分もかなり高い筈なのだが、これには負ける。そして、何よりその風貌。鬼男は言葉を失った。

これまで様々な時代の者達を目にしてきたが、ここまでの美貌には滅多にお目にかかれないのではあるまいか。あの美青年と名高い“河合曾良”と引けを取らないほど。凄い、荘厳な男性だ。

閻魔より少し年上であろうか。濡羽色の髪を耳の前に一房ずつ垂らし、目許は大きな冕冠べんかんによって生じた陰で隠されている。が、薄く微笑んでいるのが口元から窺えた。纏う衣装は暗色の袍ほうで、美しい刺繍が施されている。

「おう、様——？」

はっとエンマを見やると、彼女の目の焦点が定まっていない。

「王……」

あれが――。

男性は優雅に笑って閻魔に何やら話し込んでいた。それに対し閻魔は不服そうに口を尖らせたり、かと思うと突然弾けたように大きく笑いだす。ずっと沈着な態度を崩さない男性とは違い、ころころと表情が移り変わる閻魔。

見ていて恥ずかしくなる。……部下として。

「……何を言ってるか聞こえるか？」

ふるふると首を振るエンマ。やはり、彼女でも駄目か。

こんなに近いのに、会話の内容がまるきり聞き取れない。気になる。

内容もそうだが、それ以上に、こんなにもエンマを取り乱させる彼が、何者なのか。

室内を内偵することのみに精神を集中させていた鬼男。だから、男性の神気が背後に迫っていたことに気づけなかった。

※

「……最近、部下が手厳しいんだ……」

閻魔が伏せ目がちに呟くと、長方形の卓の真向かいに座った男は顔を上げた。

「ほお、お前が気を病むとは珍しい。その部下様は大層屈強なお方なのであらうな」

その口調・動作全てに優雅な気品を感じさせる。

閻魔がすかさず反論した。

「君までなに言ってるんだよ。辛辣な部下を持つといろいろ厄介なもの！あれをやれこれをやれ、娯楽を楽しむな働けってね。俺の自由が制限されちゃってさ。もう参っちゃうよ」

はあと重々しい息を吐き出し、自分の分の茶を嘆息と共に飲み下す。優美な男に対し、こちらはいかにも下品な態度。

ぷはあと酒を一気飲みしたように湯呑みを勢い良く置き、卓上に突っ伏した。

「随分とお疲れのようだな。相変わらず面白そうな生活だ。……で、“あれ”はどうしてる」

力無くへたり込んだ閻魔の身体がぴくりと反応する。

それを視界の隅に入れつつ、男は湯呑みを口元につけながらあらぬ方を見やった。

「長く滞在するにはちと向いてないがな、“あれ”はいい子だ。少しはお前の苦労も無くなるだろう」

顔を伏しているから男にはわからないが、閻魔が酷く真剣な様子に変貌したのは感じ取れた。

「……殺されるのか」

普段の天真爛漫な閻魔では決して感じられない硬い声音。先程の呑気な口調と打って変わった真剣な調子であった。

「君はいつもそうだ。突然現れてはこっちの虚を突き、俺を誘い込む。長い付き合いだから許すけど、他人だったらまず死んでるぞ」

閻魔の最高潮の脅し文句。常がにやはにやはとした馬鹿キャラだからこそ、その威力は倍に増す。そう、閻魔の本性は恐るべき閻魔大王。亡者となった人間を罰し、時に地獄へ葬る血濡れの邪神。その肩書きが彼の殺意を数十倍に跳ね上げた。

殺気を剥き出しにする閻魔を前にしても、しかし男性は尚も薄ら笑いを浮かべている。まるで閻魔の激昂を楽しんでいるかのように。

「そう憤るな。いつものキャラが台無しだよ？ 何も私だって理由も無しに押し入ってないさ。時と場所を考え、人目につかぬよう訪れている」

そうであろう？ と男性は穏やかに返答を促した。その空気に呑まれたら、誰しも一瞬で毒気を削がれてしまう。男性を前にした閻魔も例外ではなかった。

燃え盛る業火のような殺気が徐々に鎮まり、顔を上げた時にはへにやら顔に転移していた。

「この間草野球の人数が足りないから入ってくれて無理やり連れ出したのはどこのどいつだったっけか？」

「まあ、それとこれとは別の話だ」

男性の笑みが乾いたものへ変わる。困ったように肩を竦めた彼に、閻魔は椅子にふんぞり返って続けた。

「ってか世間一般の信仰者は可哀想だよねえ。恐れ多き地獄の君主様のご趣味が、まさか平凡かつ陳腐な草野球だなんて」

ニヤリとにやける閻魔。そこで初めて男性の口元が歪められた。

「陳腐とは失礼な物言いだな。お前だって相も変わらず変態的娯楽（ショタコン&mp;セーラーLOVE）を続けているのだろう？ 気の毒に。彼だって疲れ果てているではないか」

「彼……？」

男性はゆったりとした仕草で扉に視線を向けると、差し出した指先を不可視の糸を引っ張るようにくいと動かした。

瞬間。

「おわっ！」

「なっ！」

支えを失い均衡を崩した鬼男とエンマが、雪崩れ込むように倒れ伏した。

「お、鬼男君とエンマ！？ そんなところで何を……」

さすがに啞然とする閻魔を黙殺し、男性は二人にのほほんと笑いかける。

「久しぶりだね、エンマ」

男性の呼声にエンマがすかさずガバツと起き上がる。

「閻魔王様！　なんでここに居るんだ！　あっちで待ってるんじゃないのか！？」

「いやいや、旧友に会うぐらい良いではないか。それにエンマ、お前の身を案じて来てやったのもあるんだぞ。こんな異常幼児好男シヨタゴンに変なことをされてはいないかと心配で心配で」

「王！　それは君だって同じだろうが！　聞いてんだぞ、女物の衣装を集めてるそうじゃないか。君も隅に置けんなあ」

「すまん、ちょい打ち切ってくれるか？」

騒然とした空気を破ったのは、鬼男の一言であった。彼はエンマの横で自分でも情けない状態のまま放置されていた。

が、即座に立ち上がると姿勢をしゃんと正して男性を見据えた。

「あんた、誰だ」

鬼男の誰何を受けてふっと口許を和ませた男性の向かいでは、閻魔が啞然とした様子で色を無くしてしまった。

鬼男君、それでさっきの（まんまと人の術にハマった事）を誤魔化したつもりなのかな……。それに、いきなり他人に向かって誰とは。

途中から独り取り残されたような雰囲気になっていたエンマは、不思議そうに鬼男を見上げている。

「誰って……オレの上司、“閻魔王”様」

簡潔に、そして簡単な即答。

へっ、と声を上げて瞳孔を細くする鬼男に、閻魔王なる荘厳な男性は鷹揚に頷いた。

「まあ、そういうことだ。話には聞いていたが目にするのは初めてだな。閻魔の近衛守護鬼、鬼男殿」

ほけらっと開いた口が塞がらない様子の鬼男。
それを横目に閻魔が眉を顰めた。

「あれ、俺君に鬼男君のこと喋ったっけ」

「何を言う閻魔。ついに脳天“も”死気にやられてしまったのかい？
いつも私に話していたであろう。それはそれは皮肉を込めて、
『鬼秘書の○○○（都合により表示出来ません）！！』、と」

閻魔王の台詞を耳にし、鬼男の神経がぶつつりと切れた。

「……そうなんですか？ 大王——？」

ゆらありと発言者へ向き直って爪をシャキンと伸ばし、恐ろしく重たい足取りで歩み寄って行く。迫る形相は乾いた笑いを浮かべているも、さながら般若のよう。

ひっと息を呑み顔を真っ青にして、閻魔が非難の声を上げる。

「言っていない、言っていないってば鬼男君！ 閻魔王の裏切りも——
ギヤアアアアア——！」

壮大に噴出する血飛沫。断末魔が虚しくこだまする。

そろそろと閻魔王の隣へ避難したエンマであったが、良い子は視てはいけないと閻魔王に視界を遮られた。

――相変わらず、面白い者達だ。

惨劇をさも楽しげに傍観する閻魔王。手を出そうなどとは、微塵も思わないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5156k/>

鬼男のカオス冥界事情

2010年10月11日05時03分発行